

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00468

研究課題名(和文) テクスト分析を用いた戦後ドイツ歴史論争の再検討

研究課題名(英文) Reanalyses of historical controversies in Germany after the World War II

研究代表者

渡辺 将尚 (Watanabe, Masanao)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：90332056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後のドイツ(西ドイツおよび再統一ドイツ)に起こった3つの歴史論争について、「〇〇主義者」といった単純な枠組みに囚われず、論者たちがなぜそのような発言をするに至ったのかを詳細に分析することを目的とした。「3つの歴史論争」とは、1961年の「フィッシャー論争」、1986年の「歴史家論争」、1996年の「ゴールドハーゲン論争」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

どの論争についてもこれまでさまざまな研究が試みられてきたが、その関心は主に、論者たちのアイデンティティを読み解きながら、彼らを文化的・社会的にいかに位置づけるかに向けられてきた。たしかに、そのようにして描き出されたその時々ドイツの文化的・社会的状況の見取り図が、個々の文学作品や文化・社会現象を分析する上で多大な貢献をしてきたことは疑いがない。しかしその一方で、彼らを一定の枠組みに押し込めてきたことも事実である。

本研究はそのような既存の狭い枠組みを打破するとともに、ともしれば危険な思想ともなりかねない言説が発生する要因を探り、そうした思想の発生を抑止することにも貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyze in detail three historical debates that took place in postwar Germany (West Germany and reunified Germany). The three historical debates are the Fischer Controversy in 1961, the Historians' Dispute in 1986, and the Goldhagen Debate in 1996.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：戦後ドイツ 再統一ドイツ ナチズム 第1次大戦 第2次大戦 戦争責任

1. 研究開始当初の背景

戦後ドイツ(分裂時の西ドイツおよび再統一ドイツ)では、大きな歴史論争が3回起こっている。1961年の「フィッシャー論争」、1986年の「歴史家論争」、1996年の「ゴールドハーゲン論争」である。どの論争についてもこれまでさまざまな研究が試みられているが、その関心は主に、論者たちの言説に表れた彼らのアイデンティティを読み解きながら、彼らを文化的・社会的にいかに位置づけるかに向けられてきた。

たしかに、各論者たちの立場を明確にしていくことでその時々ドイツの文化的・社会的状況の大まかな見取り図を描くことができ、それが個々の文学作品や文化・社会現象を分析する上で多大な貢献をしてきたことは疑いがない。しかしその一方で、各論者を明確に位置づけようとするあまり、彼らを一定の枠組みに押し込めてきたことも事実である。

たとえば、報告者が本企画前から着目し、分析を始めていた歴史学者エルンスト・ノルテは、「歴史家論争」のきっかけを作った人物であるが、彼はこれまで、その反共的発言から新保守主義*のイデオログであると見なされており、彼のナチズム擁護の言説はすべてこうした立場に端を発すると理解されてきた。しかし、彼の主張には同時に反米的要素も潜んでおり、新保守主義という1つの枠組みに回収してしまうのは、多分に無理がある。

*伝統的な価値観を維持しながら、一方で「小さな政府」を目指すなど、旧来の保守派とは異なる新たな理念を掲げる政治思想である。冷戦時代の西側の首脳たちの多くが共有したもので、代表的なところでは、アメリカのレーガン、西ドイツのコールなどが挙げられる。

2. 研究の目的

上記のような事情に鑑み、本研究は、「〇〇主義者」といった単純な枠組みに囚われず、論者たちがなぜそのような発言をするに至ったのかを詳細に分析することを目的とした。その際、報告者が着目したのは、第1次あるいは第2次大戦(ナチズムを含む)に関して、ドイツの罪を過小評価するような主張を發し、各論争においていわば「異端」とされた者たちの言説である。具体的に例を挙げれば、「フィッシャー論争」では、第1次大戦時、ドイツ政府に戦争を行う意志はなかったとしたゲルハルト・リッター、「歴史家論争」では、ナチによるホロコーストはソ連共産主義の脅威に対する恐怖から生じたと主張したエルンスト・ノルテ、「ゴールドハーゲン論争」では、ホロコーストは、反ユダヤ主義よりも、厳しさを増していった戦況こそが主たる要因であると主張したハンス・モムゼンなどの論者たちである。

このような論者たちは、歴史学会あるいは社会から「異端者」の烙印を押されながらもなお、自説を主張し続けた者たちである。報告者が彼らに注目するのは、そこまでの危険を冒してドイツの罪を過小評価する言説を發する背景には、必ずや別の意図——その多くは、論者自身も気づいていない無意識的な欲望である——が潜んでいると考えるためである。

3. 研究の方法

上記の目的を達するために報告者が用いたのは、各論者が無意識裏に用いる小さな語に着目し、その用語法から背後に潜む意図を探るという、いわばテキスト分析の手法である。「各論者が無意識裏に用いる小さな語」とは、具体的には、リッターの言説で、学術的な論文の中に突如として挿入される「私(ドイツ語: ich)」, ノルテがナチズム下で行われた行為を形容する際に用いた「アジア的(asiatisch)」, モムゼンが、ホロコーストを実行するに至った第2次大戦下のドイツ人に対して使用した「野蛮状態(Barbarei)」などである。

4. 研究成果

以下、それぞれの論争ごとに、本研究によって得られた成果を記述する。記述する順序は、研究に着手した順ではなく、起こった年代の早い順に配置した。なお、引用中の()および「」はドイツ語原文にもあるもの、[]は報告者が補足のために加えたものであることを示す。

(1) フィッシャー論争(1961)

①論争概要

ハンブルク大学の歴史学教授フリッツ・フィッシャー(1908-99)が、1961年に出版した本『世界強国への道: ドイツの挑戦, 1914-1918年』は、同じ時代を研究する他の歴史学者たちから激しい反発を招き、のちに「フィッシャー論争」と名付けられる大論争へと発展した。

フィッシャーの論点は、(一)第一次大戦は、世界的覇権を手に入れようとしていたドイツが、難色を示すオーストリアをけしかけて積極的に推し進めたものであること、それゆえ、(二)時の宰相ベートマン=ホルヴェークだけでなく、ドイツ政府要人、外国に駐在する大使・外交官をも含めた政治関係者全体に戦争遂行の意志が存在したこと、以上の二点に集約することができる。

②ゲルハルト・リッター(1888-1967)の反論と、その背後に隠された意図

リッターも、当時のドイツに、極右主義勢力「全ドイツ同盟」を始めとして、ドイツの勢力を拡大するために戦争を望む者たちが多数いたことは認めている。しかしそれでもなお、ベートマ

ン=ホルヴェークを宰相とするドイツ政府に戦争遂行の意志はなかったと主張する。ドイツ政府は自ら望んだのではなく、急進派たちに押し切られたのである。そうした言説の中に以下のような文言がある。ここに唐突にも「私」、つまりリッター自身が登場する。

今日、こうしたことすべて [=当時のドイツ人たちが、ドイツの勢力拡大の必要性を信じていたこと] は、傲慢で錯誤的と批判されるかもしれない。確かに「全ドイツ」 [=「全ドイツ同盟」] の出版物には実際威圧的=攻撃的性格があった。[しかし] 開戦前の教養ある若者層（私もその一員であったが）は、それとは違う感覚を持っていた。

リッターは、ベートマン=ホルヴェークの政治を同時代人として直接目の当たりにした人物であり、さらに第一次大戦への従軍経験もある。上記引用は、まさにそうした同時代人の立場から、当時抱いていた自らの思いについて語った文言であると言える。それによれば第一次大戦前、国内が戦争に向けて熱狂する中で、自分たち教養知識人層の若者だけは健全な意識を持ち続けていたというのである。

ここで 1 つ疑問が生じてくる。こうした自己意識から、なぜドイツ政府に戦争遂行の意志はなかったとの主張が生じてくるのだろうか。別の言い方をすれば、両者の間には、どのような関係があるのだろうか。

本研究によってたどり着いた結論は以下の通りである。すなわち、リッターがドイツ政府の戦争意志を否定するのは、彼らを擁護するためではなく、むしろ彼らの「弱さ」を非難するためであった、ということである。なぜなら、「自分たちだけは健全であった」ということは、狂信的な「全ドイツ同盟」だけでなく、そのような極右主義者に押し切られたドイツ政府もまた異常であったことを意味するからである。

リッターが本当に語りたいのは、自らの健全性である。しかし、彼の論文の中でそのことが大っぴらに語られることはない（上記引用から明らかなように、文章中の（ ）でごく控えめに示されるだけである）。それは、ベートマン=ホルヴェークの戦争意志が否定されればされるほど、それに代わって自然と——本人にとっては依然無意識のまま——前面へとあぶり出されてくるものなのである。

（2）歴史家論争（1986）

①論争概要

当該論争は、ナチズムは、何ものとも比較され得ない唯一無二の歴史事象などではなく、はるか昔から繰り返されてきた残虐行為の系譜の中に位置づけられ得る、とする歴史学者エルンスト・ノルテ(1923-2016)に対して、哲学者・社会学者ユルゲン・ハーバーマス(1929-)が反論したことによって開始されたものである。その後、多くの歴史学者あるいは知識人たちが加わって、新聞紙上を主な舞台に戦後ドイツ最大規模の論争へと発展した。

②エルンスト・ノルテの主張と、その背後に隠された意図

ノルテは、ナチズム下で行われた残虐行為を、共産主義者たちが行ってきた類似の行為の系譜に位置づけようとする。その際、彼がナチのホロコーストに直接関わりのあると主張するのが、スターリンの粛清などに代表されるソ連共産主義である。ノルテは以下のように言う。

…にもかかわらず、つぎのような問いは、許されるどころか、不可避なものであると思われる。ナチ、つまりヒトラーが「アジア的」所業を実行したのは、もしかしたら、自分たちおよびその仲間たちが、現在「アジア的」所業の餌食になっている、あるいは将来的にそうなると思っていたから、というだけなのではないか。アウシュヴィッツより、「収容所群島」の方が先なのではなかったか。ボルシェヴィキの「階級抹殺」が、ナチの「民族抹殺」の理論的、実際的先駆ではなかったか…

引用 2 行目の「アジア的」所業はナチによるホロコースト、3 行目の「アジア的」所業はスターリンの恐怖政治を指す。また、「収容所群島」とは、実際にそのような島があったのではなく、ソ連国内にまるで多数の島が浮かんでいるかのように収容所が点在している様を表現したものである。ノルテは、ヒトラーがソ連共産主義への恐怖のあまり、自らも同様の行為を起こしてしまったというのである。したがって、そのように両者に関連が見いだせるのであれば、ナチズムも共産主義者たちの残虐行為の系譜に位置づけてよいのである。

この主張の第一の問題はもちろん、ヒトラーとスターリンの残虐行為を、その差異を一切無視して一緒にしている点である。しかし報告者の興味は、ノルテの論を道徳 / 倫理的にどう弾劾するかではなく（報告者も当然、道徳 / 倫理的に問題がないと言うつもりはない）、なぜこのような主張を行うのかという点にある。その際、報告者が着目したのは、上記の引用中にある「アジア的」という語である。

既存の研究において見逃されてきたこの語は、詳細に観察すれば非常に違和感のある表現である。なぜなら、たしかに「アジア的」という語は、「野蛮」という意味でヒトラー自身も用いたものであるが、しかしそれゆえ、自らが行う行為について「アジア的」と形容することはなか

ったからである(ソ連共産主義については、ヒトラー自身も演説で「アジア的」と罵っている)。ナチズム下で行われた行為を「アジア的」、つまり「野蛮」と言っているのは、何よりノルテ自身なのである。ではなぜノルテはナチの行為を「アジア的」と言うのだろうか。この問いへの答えが、同時に、上に挙げた「なぜヒトラーとスターリンを一緒くたにするのか」という問いに対する答えとなる。

本研究によって得られた見解は以下の通りである。すなわち、ノルテ自らが用いる「アジア的」には、肯定的・否定的、いずれの側面もあるということである。ナチズム下のドイツが、ユダヤ人を始めとする大量虐殺を行ったことは、「アジア的」/「野蛮さ」が否定的に現れた事象であると言わざるを得ないが、その一方で、世界支配を望むほどの大胆さ・勇敢さを持ち合わせていたという点は、ノルテがぜひとも評価したい、「アジア的」姿勢の肯定的側面なのである。

反共的発言でも知られるノルテが、ヒトラーとスターリンを同列に置くことができる理由も、これで説明することができる。国内に恐怖政治を敷くことしかできなかったスターリンと異なり、ヒトラーは「アジア的」/「野蛮さ」を世界支配という大胆な試みにいわば「昇華」することができたからである。

(3) ゴールドハーゲン論争 (1996)

①論争概要

アメリカの社会・政治学者ダニエル・ゴールドハーゲン(1959-)が、1996年に出版した著作『普通のドイツ人とホロコースト——ヒトラーの自発的死刑執行人たち』に端を発する論争である。当該書籍におけるゴールドハーゲンの主張をまとめると、以下のようになる。(一) ナチによるホロコースト自体は20世紀の出来事であるが、19世紀のドイツにはすでに、ユダヤ人への差別を越えて排除や抹殺を望む過激な反ユダヤ主義が広範囲に行き渡っており、後にナチズムを生む土壌が出来上がっていた、それゆえ、(二) たしかに上からの命令はあったが、それでもドイツ人たちは「自発的」に虐殺を実行した。

②ハンス・モムゼン(1930-2015)の主張と、その背後に隠された意図

これに対しモムゼンは、ドイツはもともと「高度に文明化された国」であり、反ユダヤ主義が広範囲に行き渡っていたことなどあり得ないと主張する。

それ [=ゴールドハーゲンの主張] は明らかに現在の研究動向に逆行しており、大部分は論拠が不十分である。また、なぜ進んだ、高度に文明化された国で、何百万という罪のない人々——特にユダヤ人——をシステムティックに絶滅させるという野蛮状態への退行が可能だったのか、この問いに対する答えについても、何ら新しい見解を打ち出してはいない。

ドイツ人が「高度に文明化され」ていたのだとすれば、なぜ彼らはユダヤ人を大量に虐殺するという「野蛮状態」へと「退行」してしまったのか。モムゼンの回答はこうである。

地方と中央、それぞれの事情の相互作用によって、ドイツのテリトリー内にいるユダヤ人を抹殺するというコンセンサスが、すべての関係者の間で形成されていったことを、最新の研究は明らかにしている。イデオロギーの影響力だけでなく [nicht allein = 英: not only], 自ら招いた物理的・精神的にせっぱ詰まった状況もまた [sondern auch = 英: but also], それ [=抹殺政策の実行] に決定的な影響を与えたのである。

nicht allein...sondern auch によって、「イデオロギーの影響力」と「物理的・精神的にせっぱ詰まった状況」が等価に置かれているように見えるが、モムゼンの力点は明らかに後者にある。戦争後半から末期にかけてのドイツ軍にとって過酷な状況が、ドイツ人たちを「野蛮状態」へと「退行」させたのである。つまり、ホロコーストは一時の病気であるばかりでなく、ドイツ人にはその発症の責任すらない。モムゼンが「野蛮状態」という語を用いて言いたいのは、以上のようなことである。

モムゼンは「歴史家論争」にも参画した人物である。しかしその際の立場はハーバーマス側であり、ナチズムの無害化を図ろうとするノルテを痛烈に批判していた。それがわずか10年後、まるでノルテの口から出て来そうな発言をしている。ではこの思想的転換とも言える状況は、どのように説明できるだろうか。

この問いに対し、報告者は両論争の間に横たわる「ドイツ再統一」に着目し、以下のような見解を得た。すなわち、まだ東欧ブロックが存在していた時代は、共産主義陣営を徹底的に悪の存在と見なすことで自らの正統性 / 正当性 (もっと言えばアイデンティティ) を確認することができていた。しかし再統一によって、かつての「敵」を取り込んだドイツは、いわばアイデンティティの拠り所を失ってしまった。その代わりとしてモムゼンが求めたのが、過去における一時の病気として「野蛮状態」に陥った、もっと言えば「無害なドイツ」だったのである。

(4) ヘートヴィヒ・リヒターをめぐる論争 (2020)

本研究は当初、2018(平成30)年度から2020(令和2)年度までの3年計画であったが、最終年度に新型コロナウイルスの流行が発生したため、上記(3)「ゴールドハーゲン論争」の分析において遅延が生じ、2度に渡って研究期間の延長を申し出ることとなった。結果、2022(令和4)年度の早い時期に、上で述べたような成果に至ることができたが、その際報告者は、当初予定の3つに加えて、21世紀に入ってからの歴史論争を追うこともまた有意義ではないかと思ひ立ち、年度内の残りの期間を用いて分析に取り組むこととした。そこで報告者が着目したのが、2020年に繰り広げられた、歴史学者ヘートヴィヒ・リヒター(1973-)の著作をめぐる論争(これまで本研究で取り上げた諸論争よりはるかに規模が小さいため、特定の名称は冠せられていない)である。

①リヒターの主張

本論争の構図はこれまでのそれと真逆である。これまでは、第1次ないしは第2次大戦に関わるドイツの責任を軽視するような発言を行った論者に対して、徹底的な非難が浴びせられてきた。しかし今回は、戦時下等ごく一部の時代を除いて、ドイツにおいては民主主義がよく機能していた——したがって彼女(ヘートヴィヒは女性に用いるファーストネームである)は、ナチズム前夜の状況さえ民主的だったのだと言う——とするリヒターに対して、同業の歴史学者らが激しく反発したのである。その一方で、当該書籍は「ドイツ第二テレビ(ZDF)」等が行っている「今読まれるべき本」2020年10月のランキングにおいて一位を獲得して一躍話題の本となり、一般の読者からは幅広い支持を得た。

では、民主的國家のドイツがなぜ2度の世界大戦を引き起こし、ホロコーストを実行するに至ったのか。リヒターの答えは、「民主主義こそが過激なナショナリズムを生む」である。民主主義は多数派の意見によって動いていくものである。この民意が誤れば、國家は容易に誤った方向へと進むのである。しかも多数が過激なナショナリズムに染まりながらその誤りに気づかなければ、それを修正することは非常に困難である。

②真逆の構図の意味

本論争においてなぜ構図の逆転が起きたのか。報告者はその要因を、シュレーダー政権(1998-2005)およびその後のメルケル政権(2005-2021)が目指し(かつ実現し)た、国際社会におけるドイツの新たな位置づけに求めた。両政権が目指したのは、国際社会に対して遠慮一辺倒だったこれまでの態度を見直し、過去への反省を忘れないという姿勢を維持しつつも、強力に自國の存在感をアピールしていくというあり方である。その新たなあり方がもっともよく現れていたのが、「コソボ紛争」への介入(1999年)である。この時ドイツは第2次大戦後初めて国外に軍を派遣したが、その際の論理は、これまでのように、「ナチズムによって世界に脅威を与えた過去を持つドイツは何もすることができない」ではなく、「そのようなドイツだからこそ軍事介入をする必要がある」というものであった。シュレーダーによって作られたこの流れをメルケルが引き継ぎ、後者がコールに並ぶ戦後2位の長期政権を維持できた事実が示すように、この姿勢はドイツ人たちに広く受け容れられ、その後ますます多くの支持を得ていくこととなったのである。

この流れと、リヒターの本が広範な支持を得たことは連動している。つまり、リヒターの本が出た時点で、ドイツ國民は「卑屈になる必要はない」というシュレーダー＝メルケル路線を共有しており、リヒターのような主張を受け容れる土壌がすでに出来上がっていたということである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡辺将尚	4. 巻 53
2. 論文標題 抑圧されたアイデンティティ 反フィッシャー論者の言説から見た「フィッシャー論争」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺将尚	4. 巻 51
2. 論文標題 「アジア的」、「好戦的」、「男性的」なナチズム - 「歴史家論争」の再検討 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 39-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡辺将尚・金津和美・佐藤伸宏・加藤健司
2. 発表標題 シンポジウム「ロマン主義の伝染力（ヴァイラリティ）」
3. 学会等名 比較文学会東北支部大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 渡辺将尚	4. 発行年 2023年
2. 出版社 共同文化社	5. 総ページ数 224
3. 書名 歴史論争から見た戦後ドイツ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------